
自分らしい生き方を

A - G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分らしい生き方を

【Zコード】

Z7202Y

【作者名】

A - G

【あらすじ】

所謂マンガやアニメへの転生もの。

主役になるには中途半端な主人公。

というより内面がネガティブな上、他者に見せる自分もコントロール仕切れずブレている。

人としての軸が定まつていない彼が物語の登場人物と接触し触れ合っていくことで、成りたかった自分に成ることは出来るだろうか？（鬱陶しいヤツなので成長してくれないと困ります）

プロローグ（前書き）

初投稿です。

拙いどこのか拙過ぎる文章です。
ご指摘や感想など頂ければ幸いです。

プロローグ

俺は今、自分の人生を振り返っていた。
といふか無理矢理振り返させられている。

俺の目の前には巨大なスクリーンがあり、さながら映画館のように妙に広く暗い空間に俺一人だけが座り、流れる映像を羞恥心とか不快感とか諦観とかをグチャ混ぜにした「いつそのこと殺して下さい」という気持ちで眺めている。

「もう死んでるのに殺してなんてナンセンスだねえ」

俺が生まれてから幼少期、少年期、青年期と今に至るまでの成長してきた流れを結婚式なんかで使われるようなダイジェストストーリーで編集されているのだが・・・

「こんなのが結婚式で流されたら千年の恋も冷めちゃうだろうねえ。花嫁さんからしたら夢から醒めさせられたかな?」

内容は悪意で編集されたとしか言いようがない。

適当な言葉で誤魔化し、嘯く自分。

他人と当たり障りのない付き合いをし、決して本心を明かさない自分。

いい加減で乱雑で卑怯で臆病で見るに耐えない自分。
作り過ぎて着飾り過ぎていい人になるように形作り、そんな自分に自分ですら持て余す。

「自分を見失うってヤツかな?でもそれを冷静に眺める自分にちょっと酔つてる感じ?」

気持ち悪い。

「うん。ぶっちゃけマジキモー」

醜いし無様だ。

吐き気がする。殴り飛ばしてやりたい。
こんなヤツ嫌いだ。

こんな自分が本当に嫌いだ。

「僕も嫌いだねえ。エヴァンゲリオン観たとき、シンジ君にも同じ気持ちを持ったねえ。まあ彼の場合は生まれ育った環境に問題があるとフオローを入れてあげるけど。因みに僕はアンチじゃないよ？
好きだからこそ苦言を呈すタイプや」

なんでこんなヤツが俺なんだ。

知れば知るほど、見れば見るほどに嫌になつてくれる。

悪意を持つて編集された映像の中の俺は、俺がずっとこいつしてやりたかった気持ちをはつきりとさせてくれる。

「「俺を殺してやりたい」」

「ハモつちゃつたねえ。これまたぶっちゃけ気持ち悪いねえ。
でも自分嫌いもここまでくると一周回つて清々しいかな？太陽系一周して漸く清々しいって感じだけど。あとさつきも言つたけど君死んでるから殺すとか無理だから。ナンセンスナンセンス」

自分が嫌いだ。こんな自分を見たくなかつた。自分を変えたかつた。
本当の意味で良いヤツになりたかつた。

格好いいヤツになりたかった。

だから・・・・・

「職業を看護師に選んだんだよねえ。人のために役立つ自分になろうとしたんだよねえ。まあそれも失敗しちゃったけど」

涙が出る。膝の上で握り締めていた手を開くことも出来ない。嫌いな自分を表面だけでも肩書きだけでも良くなしたかったのに・・・・・

「自分の医療ミスで患者さんを死なせちゃって、患者さんの遺族に責められ懲戒免職。いよいよ内面どころか外面も取り繕つことも出来なくなっちゃったねえ。挙げ句の果てに」

スクリーンの映像が変わる。
俺の最後の場面・・・・・

「茫然自失で歩いてたところを階段を踏み外して落ちてきた子供を受け止めて転倒。頭の打ち所が悪くてぱっくり。
そして今は僕の前。

うーん、テンプレート」

もう涙も言葉も出ない・・・・・
いや言葉は出るか。

時間にして約三時間半の『偽りだらけの我が生涯』という無駄に凝った映像を見終わり、座っていた丸椅子を基点に身体の向きを変えれる。

俺の1メートルほど後ろでソファーにじっかり座った男性と田が合い絞り出すよつこ声を掛けれる。

「で、俺はなんで自分の人生の総集編を精神的苦痛アリアリで見せられたんですか？」

明かりが俺の背後のスクリーンだけなので逆光みたいになり、只でさえ陰鬱な俺の顔に更に陰がかかっている。

そして丁度スクリーンに流れる監督から脚本まで全員同じ名前のスタッフホールと同一人物の口に出す。

「その、えっと……神様？」

プロローグ（後書き）

自分で推敲しても全く修正できていない事実。
修正したら涙が出るほど元の原型が保てない。
おかしな点がありましたらご指摘お願い致します。

第一話・回りの窓（前書き）

誤字や脱字、おかしなところがあつまつた「ひ」指摘のほどお願いします。

第一話・向ひつ側

スクリーンにエンドマークが表示されてから無駄に広い室内が照明が灯る。

(と言つても照明器具らしきものは一切ない)

気がついたら丸椅子に座り、最悪な自分史を延々と見続けさせられていたので実際の室内の広さを確認出来たのは今が初めてなのだけども。

広い・・・ではなかつた。

スクリーンと俺と丸椅子、そしてソファーに座る神様(?)の他はただ延々と真っ白い空間が続いているだけ。

正直、真っ白な空間なんて表現はよく聞く(見る?)けれども、実際に自分がその場にいると発狂しそうになるくらいの異常空間だった。

約三時間半の苦行で磨耗した精神状態には堪える。

「自分の人生を苦行だなんて、君は『田覓めた人』にでもなりたいのかな? だとしたら苦行が足りないねえ。あと二千年くらい」

ニヤニヤ笑いながら目の前の男性・・・もう神様でいいか、神様はさつきからずけずけと人の内面に入り込んでくる。

「あの、先程からもそうでしたけど・・お、私の考えてることが解るのですか?」

といふか解るのだろうな。この異常空間は落ち着かないものの、俺の順応性は案外高かつたらしい。

会話をする取つ掛かりとして何となく聞いてみたが、これは居心地が悪い。

本音と建て前がバラバラな上、何気ない会話ですら頭の中でシミュレートしてから話す俺としては「コミュニケーションの相手としては最悪の相手だ。

「初対面のヒト（神）を最悪の相手と認識して会話するのは一社会人として如何なものかねえ」

・・・・ほら最悪だ。しかもやはり心の中を読まれている。
普通、ニヤニヤした顔で裏も表も読まれている相手となんて会話なんでしたくもないだろ？
しかし妙な感じだ。

神様が笑っているのは解るのに、顔付きや体格、年齢や服装といったものを認識出来ない。

何となく男性っぽいと思うのだが、個人として特定出来ないような・

・・・自分の人物描写が苦手という弱点が露呈してしまった。いや背景描写とかその他諸々も苦手だけど。

「メタっぽい発言だねえ」という神様の発言も大概だとは思う。

「まあ君の思う通りでグルグル渦巻く考え方通りだよ。人間の一人や一兆人くらいの思考なんてちょちょいのちょいで読み取れるよ。君の『ちょちょいのちょいは古い』って思考もねえ」

つくづく嫌すぎる相手だ。帰りたい。逃げ出したい。

なるべく平静を保ちたいけど、思考を読まれ、胸の内を透かされるだけでいっぱいぱいなのに、異様な空間と対面の人物からくる圧迫感で身体が全く動かない。汗が止まらないし鼓動も早鐘のようにずっと鳴り響いている。さっき俺は意外と順応性が高いとか言ったけど無理だ。

馴染めるものかこんなもの。

所謂転生系主人公の人達はこんな空氣の中で神様と普通に会話して
るのか？

そんな真似が出来る時点で普通の人間じゃない。
完全に『あちら側』の人種だ。

「君も十分『あちら側』だと思つけどねえ。君の言葉を借りるなら
『大概』だよ君も。

ふう、凡人の枠内に居たいのかな？憧れるけど怖いのかな？」

「私は・・・」

「『俺』でいいよ、いちいち切り替えてるのが見てて聞いてて気持
ち悪い」

「・・・・俺は凡人で普通です。さつきの映像でも再認識しました
し。

いや俺はたぶん普通よりも下です・・・・貴方の言われる通り気持
ち悪いヤツです。感情と理性がちぐはぐで思考もバラバラです。適
当な言葉と態度と誤魔化しで体面を作ってる人間です」

自分で言つて嫌になる。何が嫌つて、こいつ風に言葉を並べて
自分を形作ると落ち着いてくるのが。

精神の磨耗云々や汗や鼓動がどうとかも誤魔化せる。

自分を作つて逃げ道を作ることに慣れすぎて、作らないと俺は人に
なることも出来ない。

映像の中の幼少期の自分すらそんな有り様だった。

我ながら気色悪い子供だと思った。

普通の家庭に生まれ普通の両親に育てられたのに、どこでこんな子
になつたのやら。

育てられた方を間違つて受け止める。

両親には先立つ不幸より「歪に育つて」めんなさい」と謝りたい。

「過小評価というより過微評価つて感じだねえ」

神様から若干あきれが混ざった言葉が掛けられる。
存在自体は超然としてるのに人間臭さが感じられる。
大体この神様は俗っぽい。

会話の端々にアニメやスラングがちらほら現れし。
そのせいか、格上なのに敬う気持ちがあまり出ない。
失礼にならないように言葉には気を遣うけれども。

「思考を読まれると解つていながら、そんなことを考えている君は
十分以上に失礼ではないのかねえ」

またふうと息をつかれる。

「い、いえ・・その決して貴方を悪く思つてるわけでなく、あ、あの・・どちらかと言えばお立場を考えるに大変気安く親しみやすい
方だと・・」

しどろもどろになりながら必死に言葉を繋ぐ。手振りを加え姿勢も
前に出てしまつ。

生前は友人（自分の矮小さを知つた今となつては自分から友人と言
える立場じやないが）から「冷静で真面目で落ち着いたヤツ」とい
う評価を貰つっていたのだが見る影もない。

またしても自分を象るものが上つ張りだけだったと再認識。
死んでからの俺、生前よりも駄目だ。

またもや駄目思考に沈んでいると、神様が笑つていた。

さつきまでのニヤニヤ笑いと違い、楽しいものを見て笑うよつしている。

クスクスと言えばいいのか？

（どうでもいいけれども、その人をはっきり認識出来ないのに感情や表情が理解出来るのはどういった理屈だらうか）

怪訝そうな俺に手を振つて笑いながら語りかけてくる。

「いやあ、楽しいねえ。君のキャラが壊れ、また取り繕つたあとですぐ崩れたり。

順応出来ない君はどこにいったのかな？

僕に畏怖する君は？

冷静が売りな君は？

主人公達と違ひ神様（僕）と会話なんて出来ない普通の人間の君はどこかな？

いい加減に気付こうねえ？

たかだか性格に難があるだけのヤツが神なんて存在会えるわけないよねえ？

言つたよねえ？過微評価だつて？

神に会つて自分の形だけを取り繕う人間が。

ただの人間だと？

はつきりと言わなきゃ解らない？

自分の逃げ道を作る暇があるくらいだから解つてるでしょ？
でもいいよ。言つてあげるよ。

羨ましくて憧れて、でも怖くて受け入れたくなかった現実を。

君は最初っから『主人公』だよ

第一話・向ひ廻（後書き）

話が進まない。

何時まで喋つてんだか・・・

第一話・転生系主人公（前書き）

誤字や脱字、おかしな点がありましたら、指摘のほどお願いします。

第一話・転生系主人公

「俺が『主人公』？」

訳が解らない。

今居る自分の立ち位置から鑑みればそう見えなくはない。

『事故に遭い死亡』

『神様と出会い会話する』

『神様から特別（主人公）扱い』

転生系主人公ものだと言われたらよくあるパターンだと納得出来る。
対象が俺でなければ・・・

「なんだつたら『勘違い系主人公』でもいいよ？
自分は大した人間じやないと思つてるのに何故か周囲の人達からは
凄いヤツだと思われたりねえ」

クスクス笑いからまたニヤニヤ笑いに戻つた神様が、ソファーにも
たれかかり足を組み替えている。

だから動作が解るのに体格も服装も解らないなんておかしいだろう。
いっぱいいっぱいな状況が多すぎる。

考えてみたら自分が死んでいるという状態に一切疑問を挟んでない。
もう今更過ぎて蒸し返すネタじやないんだと無理矢理納得する。

クッションも敷いてない硬い丸椅子に三時間以上座つて、いい加減
尻が痛いことも今更だ。

大体死んでいるのに痛いやら心臓の鼓動やらもう滅茶苦茶じやない

か。

展開に流されて忘れられてるかもしだれないけれども、生前は俺は看護師だつたんだ。

新米だつたけど。

こんな現代医療に真っ向から喧嘩を売る状態になつていて、「死んでいるのに生きているんだ俺」と思つ自分が嫌だ。

自分を着飾る為になつた看護師とはいえ死ぬほど勉強してきたのは事実。

何日も徹夜もしたし、課題やレポート、看護記録なんかを書きまくつて二十歳そこそこで肩こりに悩まされ整体通いままでしていた。

苦労してきた生前のことを自分自身でなかつたことにしていた訳だ。

看護師を目指した動機も不純で利己的。

働いていた時も患者を見守りながら看護をしながら、自分をよく見せるポーズにしていた。

最低だよ。最悪過ぎるだろ？

何よりも最悪最低なのが、『人一人殺しておきながら、のうのうと事故死してその過失をリセットしている自分』に気付いたからだ。

さつきの自分の映像を見てまだ一時間もたつていない。
死んだから終わったことにしている自分に吐き気がする。

何もない真っ白な空間？

異常だよ、ああ異常異常！

時計もないのになんて上映時間がわかつた？

時間の経過が正確に解るのは何故だ？

答えは『よく解らないけど何故か解る』だ！！

じ都合主義もここに極まつてる。

なかつたことにしていた罪悪感に頭を抱え込んでいた俺を、一言も話さずただ眺めている神様。

自己嫌悪で狂いそうで懺悔する人の気持ちを理解する。

「赦されるつもりも赦されられないつもりもない人間が懺悔してもねえ」

「君はほつとくとすぐ自己嫌悪と自己弁護に走るんだねえ」と辛辣な言葉を頭上から掛けられる。

神様はいつの間にか立ち上がって俺の前にいたらしい。

「僕から言われるまで『転生』なんて口にしなかったのは、人を死なせておいて自分が助かる逃げ道がある可能性への罪悪感と期待からかな?」

唇を噛み締めながら降りかかる言葉を黙つて聞く。

「最低な看護師さんだもんねえ。まあ僕に言わせてもうれば、お金貰つてその分しつかり働いていたんだから良く見せる為のポーズでも問題ないと思うけど」

「格好いいポーズってね」と神様は笑いながら話す。

「魔法陣グルグルまで知ってるんですか・・・貴方普段どんな生活を送っているんですか・・・」

神様と漫画の趣味が合いそうだ。

絶賛自己嫌悪中（神様の言うように自己弁護中でもある）であつても会話の小ネタに反応してしまつ。
本当に俺はどうなりたいんだろう？

漫画や小説の中の主人公。

真っ直ぐでひたむきで格好良くて。

迷つても悩んでも最後には立ち上がる。

嘘ばっかりで逃げ出してばかりの自分とは大違いいだ。
死んでからも逃げ出そうとする自分とは本当に・・・・・

「格好いいヤツになりたいなあ・・・・・」

「人生二回目の本音だねえ」

神様が嬉しそうに笑っている。

自分でも確かに本音を言ったと思う。でも二回目?

「看護師を目指す時も言つたよねえ。」

『格好いいヤツ。いいヤツになりたい』

結果は伴わなかつたし目指した目標も自分の為の手段に成り下がつた。でもあの時の君は二十数年間の人生で一度だけ変えようとしたんだよ。

取り返しのつかない失敗はしたけど、そこまでの努力だけは本物だよ。

神様である僕が保証してあげる」

畜生。赦されるつもりも赦さないつもりもなかつたのに・・・・・

生前から死んでからまで、今漸く少しだけ救われた気持ちになつてしまつた。

今更が多すぎるけど。

二十数年間も生きて死んで。

俺は初めて素直な感情を表出して泣いた。

「で、君の転生先なんだけねえ」

大の大人がわんわん泣いた数十分後。

神様は漸く本題に入つたとばかりに説明を始めた。

俺はといふと所在なさ気に例の硬い丸椅子に座り直している。

氣恥ずかしさがメーターを振り切つているが流石に今回は逃げ出せない。

泣き止んでしまうと冷静になつてしまい自分の醜態を思い出し、なかなか顔を上げられずどうしようかまたもや逃げ道や誤魔化し方を考えていたら「知らないのかい？神様からは逃げられないんだよ」とご親切なことに逃げ道に回り込まれた。

絞り出すように「それは大魔王の台詞です」と目と顔を赤くしながら咳き神様の前に座つた。

わざわざ冗談を交えて俺が起き上がりやすいように配慮してくれるのが嬉しかった。

でも神様のニヤニヤ笑いを見て、ただその台詞を言いたかつただけだとわかり嬉しさが引っ込んだ。

「候補は3つ。

ひとつめは中世なファンタジーな世界。剣と魔法を武器にモンスター

「や魔王を倒すロープレ的な展開」

王道つてやつかな。

俺の考えを読んでか神様はうとうんと頷く。

「ふたつめは現代風ファンタジー。現代社会を基盤としつつ裏の世界には異能と異形があつたり色々ね」

超能力バトルとか？

現代の闇に潜む怪異との戦いみたいなものも含むのだらう。

これまた神様はうとうんと頷く。

神様といふと会話という基本的な「//」二ヶーショントールが退化しそうだ。

「最後は最近の転生先でも流行りかな？漫画やアニメの世界に入っちゃうやッ」

・・・・これまた王道テンプレな。

つまり先の二つだと全く知らない世界行くわけだ。

行つた先では何が起きるかわからない。

自分の力で切り開く正に主人公となる・・のかも知れない世界。

この解釈であつていいのだろう。神様は両腕で頭の上に丸を作つている。

シユールだ。

最初の頃の威圧感はどこにいったのだろう。

まあ神様は終始ニヤニヤしていただけだし俺が勝手に恐怖していたのかも知れない。

それか単に慣れただけか。

俺もいい加減に力が抜けたよつて思うし、本音と感情を晒して開き直つたのだろう。

しかし本質が変わった訳ではないので、自己に埋没すればまたドロドロした思考に捕まってしまう。

生まれてからずっと一緒に育ってきたようなものだし、早々割り切れたりはしないし、切り捨てるこども出来ないだろう。

というかこういう思考状態がドロドロに入りこむ原因だ。

考えたら沈むし考えなれば先ず動けない。

つくづく・・つくづく自分が嫌になる。

とか言つてる内にまた沈みかけており、神様がポカッと頭を叩いてくれたおかげで頭と思考が浮き上がる。

有り難いけど擬音の割には痛烈な一撃だつた。

「さて君はどれにするか決めたかな？」

なんて説明した手前で言つたけど、正直君が選ぶ選択肢は解つてゐんだけどねえ」

神様のニヤニヤ笑いももうテンプレだ。

言つ前から答えが解られてゐるのは少ししゃくだが、それこそ今更言つことじやない。

大体俺の答えはそれこそ説明される前から決まつてゐる。

神様の目（おおよその目の位置）を見ながら俺の選択した答えを告げる。

「俺は主人公だと神様が言わされましたけど、俺は主人公じゃなくていいんです。

俺は自分が憧れた主人公達をその側で見たい。

その強さや信念、生き様を物語の中で生きる姿を見て感じたい」

主人公の仲間や協力者でなくてもいい。

傍観者を気取るつもりはないけど、共に生きる世界で、世界を守り仲間を守る主人公達を見たいんだ。

「うん。了解了解。どの道、二番を選べばひとつめもふたつめも一緒にだからねえ。要は君の立ち位置が変わるくらいだからねえ」

神様は「まあ、立ち位置がどうとかなんて気にしても無意味だけど」と妙に引っかかることを眩いでいたが、それを追求しようとしても「気にしない気にしない」と適当にあしらわれた。

適当な誤魔化しは俺のキャラなんだけど。

「じゃあ後はどの世界するかなんだけど、希望はあるかな?」

考えてなかつた・・・

主人公のいる世界云々とかは考えていたけれども、どの世界に行くかは全くノープランだった。

行ってみたい世界、あつてみたいキャラクターはいっぱいあるけれども、みんなみんなみんな叶えてはくれまい。ここでまた頭を抱える事態に陥るとは。

肝心な時にはいつも俺はこうだ。本当にどうしようもない男だ。くそつ！鬱だ死のう！

「しょうもない」とこりで沈むねえ君は

また頭をボカつて叩かれた。さつきよりも痛かった。擬音がそれを現している。

「本当はゆっくり決めて貰つても構わないんだけどねえ。
まだ決めなきゃいけないこともあるし、今回は僕が君にぴったりの世界を選ばせ貰おうかな」

俺は優柔不斷なところがあるので、神様のオススメを選んで貰える

のは有り難い提案である。

あれこれ考えたい気持ちもあるので不満がない訳ではないが、それこそ思考の負のスパイラルにまた入り込む可能性がある以上この方が無難だ。

苦しい時は神様頼みだ。本神が田の前にいることだし。

「神的な本音を言えば、いちいち沈んでる想をサルベージするのも面倒だしねえ」

俺を前にしてぶっちゃけ過ぎだと思つ。

「さつきみたいにネコ型ロボットの歌で遊びながら選ばれるのもみていて気持ち悪いし」

そこもぶっちゃけ過ぎだと思つー。

そしてその件に関してはスルーして頂きたかった！！

結局神様にお任せした形になつたが、行き先については「ついてからのお楽しみ」らしい。

不満はなくはないが不安はそれなりにある。
知つてゐる世界だといいのだけれども。

第一話・転生系主人公（後書き）

転生前からウジウジジメジメ回りくどくて鬱陶しい主人公。
おかげで話が進まないつたらありやしない。

神様の読心設定で主人公が喋らなくてもいい分、余計に思考に沈む
ようなつてしまつた気がする。

ダウナー系主人公なんて何がいいんだ・・・

第三話・規格外の能力（前書き）

誤字脱字やおかしなところがありましたら、指摘のほどよろしくお願いします。

今回から文章量が少しづつ多くなっていいく予定です。

しかしどうかなった。

第三話・規格外の能力

「さてお待ちかねえ。

当事者も観客も誰もが一度と言わず一度も三度も夢想し期待する展開だよ。

君はどんな能力を望むのかな?」

「そういう流れになるのかなとは思つてましたけど、本当にありますね。転生前の『都合イベント』

正直期待していた。

自分がもし物語に関わるならこんな力が欲しい。

あんな武器を使ってみたい。

最強。無双。チート。

ちょっと痛い妄想なんて誰だつてしたことあるだろ?。

俺だつて中学生くらいによく発症する病と十年以上付き合つてきたんだ。

いい年して胸が躍つたつていいじゃないか。

膝の上で握り締めている手に力が入る。

口元も緩んでいる気がする。

何の因果か自分だけが得られた幸運を嬉しくないわけがない。

でも・・・

「あの神様、一つ確認したいことがあるのですがお聞きしても宜しいですか?」

「『どうして俺なんかにここまでしてくれるんですか?』かな?」

神様が俺の疑問を、素直に喜べない心情を察してくれる。

俺は単純に喜んだり浮かれたりしてはいけない。

生前の自分は決して真っ当な人物だとは言えない。

それに事故とはいえた人を死なせている。

なのに自分が降つて湧いた幸運をただ享受することは出来ない。

先ほどより強く握っていた手を一度開いてからまた握る。

じんじんと手のひらに痺れとも痛みとも取れる感覚がある。

この程度の痛みで贖罪を気取るつもりはないけれども、少しでも自分に向かの罰を与えていないと心が耐えられない。

自分が反省している姿を作つていないと好意も施しも受けられそう

にない。

「面倒臭い人だねえ君は。『ヤツタ！ヤツタ！』と喜んでいればいいのに。

話をちやっちやと進めたい僕の気持ちも察してよ」

嘆息する神様に申し訳無さがまた一つ追加される。

思わず「ううう」と呻き声を上げるけれども、神様の方は俺が気になつてしまふことにひいて答えくれるらしい。

ふうと息を吐いてから口を語り始めた。

「この際だから君の疑問や困惑、良心の呵責なんかを纏めて解決しちゃおう。

先ず一つ。君が死んで僕の前に来たのは偶然でも幸運でもましてや僕のお情けでもない。

最初から決まつていた決定事項だよ。

僕は言ったよね？普通じゃないから君は此処にいるつて。

君は生前過ごしてきた世界にとつてイレギュラーなのさ

イレギュラー？俺が？なんで？

想像もしてなかつた答えに反射的に身体が浮き、その反動で丸椅子がガタッと音を立てて倒れる。

神様は俺に手を翳して立ち上がるのを制する。

丸椅子を直して座り直すが流石に落ち着いてはいられない。

「イレギュラーなんだからそうとしか言えないねえ。

ああこれは別に君が死ぬ際に助けた子供のことは関係ないよ。

あの子は君と違つて普通の人間。完全無欠の一般人だよ。

それこそ君が助けず死んでいたつて全く世界には影響はない。

後世にも響かない」

「助けてくれた君が死んだことでトラウマなり罪悪感なりは生まれたかもねえ」と意地悪く続ける。

あの子を俺の現状に対する理由にするつもりはなかつたけど、死んでも構わないように言われると不快に思つ。

助けたことがあの子にとつて悪いように聞こえるから尚更だ。

そんな俺の様子を見て肩をすくめる神様。

眉間に皺が寄り睨むように前を見るが全く気にされていない。

「そんな顔されてもねえ。僕にとつてただの子供の一人や千兆人死のうがどうなるうが本当にどうでもいいんだよ。

人間の感覚で神（僕）をはからないで欲しいな。

別に僕からすれば人間なんて虫けらとか塵芥だなんて思つてないしねえ。

人間は人間。

虫けらは虫けら。

しつかり線引きして混同はしないよ。

それに君の死云々があの子供に影響を与えたからつてなんだい？
トラウマになるかもしれないけど、それで塞ぎ込むのも助かつた命に報いるのもあの子次第だよ。

助けた責任を持ち出すのは格好いいかもしれないけど、死ん今まで気にすることかい？

なんだつたらあの子の夢枕に立つて『助かってくれて有難う！俺のことは気にせず楽しく生きてくれ！』って言いに行く？それで満足するのは君であつて君だけだよ。

利己的で自分本位な人間を気取るなら、助けた結果だけに満足して後のことなんか省みないようになえ。

善行も偽善も悪行も偽悪もやるなら徹底的にやつてねえ。

中途半端は君のキャラクターだけどやられた方は困っちゃうよ

・・・・一気に虚仮卸された。

善いことをして説教されるなんて理不尽過ぎると思うけど、呆氣にとられて眉間にどこりか唇や手や身体中から力が抜けている。だらんと四肢を垂らし口を半開きにしている俺はさぞかし間抜けに見えることだろう。

反論する気も失せた。

俺の思考と心情を読み取り、わざわざいらぬ説教をさせられた神様も「あーあー」と喉を押さえながら発声し仕切り直している。説明を脱線された意趣返しも含めた説教だったのだろう。

神様の癖に器量が小さい。

とは言え俺の思考にいちいち付き合つてくれるのだから神^{ヒト}がいいのかもしねれない。

他人の思考を読めるなんて便利に思えたけれども、俺を相手にしている姿を見るとロミコニケーションツールとしては不便極まりないな。

面倒臭いと言いながら面倒見がいいのは神様の性格だろうか。難儀な神様だ。

「あーあー、うん。よし話を戻すよ。

君はイレギュラーだつて言つたけど、その理由を説明したげる。君は君が居た世界にとつて規格外なんだよ。笑っちゃうくらいに規格外。

その気になれば現実世界に君臨する魔王になれたかもねえ。
ねえ？規格外でしょ？

幸か不幸か、君が中途半端な卑屈人間で外見を飾る程度にしか能力を発揮してないから問題はなかつたけどねえ。

死んだ後の魂だけでも規格外だつたから、肉体を失い制御不能の無意識状態で力を発揮して世界に影響を与えるとするんだもん。何が起きたか教えて欲しい？ああ怖がらなくて大丈夫。被害は全くないよ。僕がすぐに拾いに行つたから。

ちょびつと洩れた力のせいでみんなびっくりしただろうねえ。

一瞬だけ地震が起きたんだよ。揺れたような気がしただけだろうねえ。安心した？

でもね、もしそのままにしてたら……」

生まれてきてしまふません。

死んでしまつてしまふません。

日本の皆さんごめんなさい。

そして生きとし生けるもの全てにごめんなさい。

どうやら俺は正真正銘の規格外イレギュラーだつたようです。

なんたつて……

「もしそのままにしてたら、日本沈没していたからねえ」

全く笑えないよ神様。

「まあそんな君だから僕の前に居るわけなんだよ。わかつたかな？」

丸々全て信じたわけではなかつたけど。

最初に見せられた最悪な自分史を初め、この不可思議空間での神様との不可解コミュニケーションを通して、もう大抵の異常なことに慣れてしまつた。

これだけ異常なことが連續して起きているんだ。転生系主人公に自分がなるくらいなんだ。

元々自分が異常だったことくらい受け入れるさ。
もうどうにでもしやがれだ。

「諦観しちゃつてるねえ。気持ちは解るつもりはないけど解つてあげるよ

神様の軽口にも返す氣力はない。

なんかもう罪悪感とか転生することへの期待と不安とかもどつか行つてしまつた。

今の俺は虚脱感に抗うことなく丸椅子から下りて地べたに胡座をかき、動物園のパンダ直しく丸椅子を左手で「ゴロ」「ゴロ」転がしながら遊んでいる。

なんだか久しぶりの逃避だ。常に自分を取り巻く世界から逃げながら生活していたあの頃が懐かしい。

「そのままいいから話を再開するよ。」

しかし死んだら日本沈没つてどんな存在だよ。地球破壊爆弾か俺は。

「つまり君が転生するつていうのは必要な処置なんだよねえ。世界を守る為みたいな。これだけ聞いたらなんかヒーローみたいだよねえ。スーパーヒーロー伝説」

しかしイレギュラーか・・・

何というか、元々俺は世界にとつて規格の外だつたんだないらしい子じやなくていてもらつたら困る子。

世界規模で家無き子か・・・

「だから君の異常な力がある程度容認される世界に行く必要があるんだよねえ。

そう意味では所謂王道転生物の異世界や超常現象満載な物語の世界はつづつつけなんだよ。異常が正常な世界だと受け入れる世界の懷も大きいからねえ」

元々自分が不必要だと思えば、かつての世界への未練もなくなると言つものだ。

それでもこんな自分でも愛してくれた人達が居た世界から完全に去るのだから郷愁の念は消え去らない。

生前は実家に殆ど帰らなかつたけど、一度と帰れないと解ると急にホームシックになる。

母さんの手料理が食べたい。

父さんとお酒が飲みたい。

妹と対戦ゲームをしながら喧嘩したい。

飼い犬（名前ワツフル雑種ハオメス）と散歩に行きたい。

思いつきり未練たらたらじやないか。

「まあ大体の君の疑問にも答えたし、半端な呵責もどうでもよくな

つたことだし、最初の最初に戻ろうかな？

転生先に必要な能力を幾つか選んで、君の能力を制限しないとねえ」

あー、なんか座っているのも疲れた。寝転がってしまおう。
床が冷たく気持ちいいな。手でさすっても床の材質なんて解らない
し何で出来ているんだろう。神様鉱物だろうか？
それにしても真っ白いと病院のリノウムを思い出す。
そういえば俺が急に辞めることになつて夜勤のシフトの変更とか大
変だつたろうな。

つぐづく迷惑かけっぱなしでいなくなるんだな俺は。

・・・・そろそろ起きるか。いくら虚脱状態だつたとは言え神様の
まえで寝転がるなんて不遜極まる。

失礼にならないようにとか考えてた癖に随分な醜態を晒してしまつ
た。

丸椅子は転がし過ぎてちょっと離れたところにある。
立ち上がり取りに行くのも億劫だし、反省の意を含め床に正座し
よつ。

神様をお待たせするのも申し訳ないし。
自分の能力も決めないといけないな。

最強もチートも俺の性格には合わないし、可もなく不可もないバラ
ンスのどれた能力にしよう。
すでにいくつか候補はあるし。

あとはそれに合わせて自分の能力を制限して・・・

えつ？

「思考の怠惰の海からお帰り。能力の候補もあるようだし、ちやつちやと決めてちやつちやと制限しようねえ」

「ちょつ・ちよちよちょつと待つて下さいっ！俺能力を貰えるんじゃないんですか！？しかも制限つて！？」

俺の存在は規格外で魂だか何だかが爆弾らしいのだけれども、あくまで俺の身体や知識は一般人のそれでしかない。

寧ろ運動音痴で体力もあまりない方だ。

こんな状態から更に制限がかかって超常世界に転生なんて無理ゲー過ぎる。

第一の人生が始まる前からバッドエンドだ。

制限プレイをするくらいなら最強チートの方がいい。

ものの数分で正座を解き神様に詰め寄った。

生まれ変わる前から命の危機だから仕方がないだろう。

「うーん、中途半端が君のキャラだつて解つてはいるけども、理解力の中途半端さは結構面倒だねえ。

ま、誤解しやすい発言をした僕も悪いか。メンゴメンゴ。

もういい加減能力の話をしたいし巻いて説明するよ。巻き巻きで

嘲りと心が籠もつてない謝罪を言ひ、さも面倒だと言わんばかりに神様は右手をヒラヒラと降つた。

瞬間、前傾気味に詰め寄つていた俺の身体は土台に立てられた細い鉄の棒を弾いた時のようにビーンと微かに震えて直立不動の状態になつた。

指先一つ、口先すら動かない。

読心以外では初めてみた異能力だけど。実際すごい力だけれども。

ここまでくるくらい俺の対応は面倒なのか。

扱いが雑過ぎる。

「言いたいことは僕が言いたいことを言ってから言ってねえ。

まあ聞き終わつたら反論する気もないだらうし僕もまともに聞く気はないけど。

先ずは制限についてだけ、さつきも言つたよつて君はイレギュラーライだねえ。

それは君の居た世界にとつても、今から転生する世界でも一緒に、だつてあちらは元々完成している世界だ。

居るはずのない登場人物はまさしくイレギュラーだらう？
君が行つても問題ないのは確かだけども、それは空いた部屋に居候するようなものなんだよ。

要は『来てもいいけど迷惑かけんなよ』ってこと。

といつてもその辺は流石は物語。最初はその世界がちょっと嫌がられしていくかもしないけど、何年かすれば落ち着いてくるから。世界も愛着湧いて『遠慮すんなよ。お前だつて俺の家族さ』みたいに感じになるから。物語の世界はあつたり危機に陥る癖にいざという時は懐が大きくパンと構えてくれちゃうからねえ。

話を戻すねえ。

居候先に行くには沢山荷物を持つていくと邪魔になるし迷惑になっちゃうよねえ？

君の場合はその溢れんばかりの無駄パワーが荷物なんだよ。
だから必要最低限の荷物を置いていく（制限）必要があるのや。解つたかな？

まあ確かに今まで平凡と言える日常を送つてきた君だから、使つたことのない能力を制限なんて言われたら焦るよねえ。
僕も配慮が足りないねえ。『めんちやい。』

でもね、力を解放した君はどんでも野郎なんだよ？
今の君を1とするがあちらの世界じゃ100万なんてことなるんだよ。

あちらの世界の一般人も基本は君と変わらない普通の人。

あちらでは一万超えたら伝説クラス化け物だつて言つたら、僕の言つてる意味も理解出来てくるよねえ？

普通の居候先に宮殿持つて行くわけにはいかないよねえ。

回りくどいかな？気付いたけど僕も大概面倒なタイプだねえ。人のこと言えないね。ゴミンゴミン。

という訳で、君の力を最低でも百分の一まで制限するよ。

勿論ちゃんと能力は解放したげるから。

それじゃ・・・うん終わり。解放して制限したよ。

その制限は僕しか解けないから実質永遠に解けない。

身体が動かないまだ実感ないだろうけど拘束が解けたら試してみたらしいよ。

自分にドン引きするから。

あとは使用する能力や身体能力について教えてあげないとねえ。

身体は基本的に頑丈、俊敏、怪力、反射や感覚機能なんかも超人扱いされるかな？

大丈夫。あちらの世界も大概超人だらけだから。

フルパワーでも出さない限りは大丈夫。

ん？フルパワーと通常と境界？

うーん・・あー・・面倒臭い。もうアレだ。界王拳で行こう。

フルパワーが界王拳20倍ね。上限だけ分かればいいでしょ？あちらには気の概念があるから丁度いいや。いいじゃない。男の子の夢だよねえドラゴンボールは。

かめはめ波は使いたかつたら自分で練習してねえ。

という訳で使用能力の一つは界王拳で決まり！

あーちょっと喉乾いたかな？ずっと喋り通しだからねえ。

まあ僕は神様だから喉乾かないんですけど。ヨホホホ！

えつと後は魔法関係かな？あちらには魔法があるからねえ。

魔法使いになれるよ？やつたねえ！でも大っぴらには使えないから

コツソリ使ってねえ？

あちらの魔法の知識とか技術いる？使ってみたい魔法なんかがあるならそれでもいいよ？

でも君はあまりゲームとかの魔法知らないんだねえ。小難しい詠唱とか大変そうだしねえ。

アレ？でも君何気に十周くらいしてるゲームあるねえ？

『ファイナルファンタジータクトクテイクス』か。いいねえ。僕もあのゲームは大好きだよ。

ただのファイナルファンタジーと違つて詠唱文もあるじゃない。やっぱり魔法詠唱文は人類の夢だよねえ。

うん！魔法はそれで行こうか。

黒魔法、白魔法、時魔法、陰陽術。あと刀の引き出すもつけといづ。勿論刀もセットであげるよ。サービスじゃないよ？刀を生み出すのもまた君の力を使ったからねえ。

刀は痛い男子の夢だからねえ。ちゅーにちゅーに。

ついでに聖剣技と暗剣技もつけておくねえ。拳術もあれば安心ですよ？

ん？心外だねえ、勝手に決めてないでしょ？

ちゃんと君の思いのままに選んでいるんだから。

最強とかチートとか嫌いな癖に随分とまあいっぱい考えてたねえ。ププ。

『型月』を選ばない辺りに拘りかプライドがあるのかな？別に怒っちゃいないよ？『さつきから笑い方とかが古臭いし鬱陶しい』って思つてることも気にしてないからねえ？

大体こんなものかな？あと何かいるのかな？

・・うんうん。

流石に過去やら失敗を引き摺る男は違うねえ。

そつか本当は最初にコレを選ぶつもりだつたんだ。

偽善的でいいんじゃないかな？

馬鹿にしてるわけじゃないよ？

今度は間違わないようにしたいもんねえ？

何事も正しい知識と正確な技術、そしてそれを扱う強い意志だからねえ。

君の場合は最後のが足りないけど、そこまでは僕はしらない。自分で間違わないように使えるようにねえ。

ふうー終わった終わった。お疲れ様、僕。

君の為にこんなに頑張っちゃって好感度が鯉のぼりだねえ。

鯉が龍に変わるくらいののぼり具合だよ。

もうちょっとしたら身体の拘束が解けるから色々試していらん？

僕は君の転生する世界を調整してくるから。

じゃあまた後でねえ

俺が気が付いた時には真っ白な空間に独りきりだった・・・

第三話・規格外の能力（後書き）

ずっと神様のターンだぜっ！！

主人公はラカンさん方式でみると最強チートもいいところですが、力を扱う技術や知識がからきしです。子供先生と同じく経験を積んで強さを不動なものになるはずです。多分。

神様が扱いやすいのでついつい甘えてしまいます。
いい加減転生させたいと思います。

ペットの犬の名前が主人公より先に登場する有り様。
未だに名前も容姿さえ描写されないし。
主人公エ・・

第四話・人生再出発（前書き）

誤字脱字、おかしな点がありましたら「指摘のほどよろしくお願いします。

文量は少な目にまとめました。
適當な字数はどれくらいなんでしょうか？

漸く此処まで・・

第四話：人生再出発

神様の一方的なようで俺の意向や主張なんかも適度に加味された協議の末に得た能力は思いの外・・

「は、恥ずかしいな・・詠唱や技の名前を口にするの」

二十代半ばの成人男性にはキツかつた。

神様に放置されてから約十分後。
本来なら此処に来た直後に思うであろう感想を述べた後、とりあえず自分の能力について確認をする。

神様曰わく、溢れんばかりのパワーやら氣やら魔力やらがあるらしいのだが、漫画やアニメのように身体からオーラが浮かぶことも無ければちょっと力んでみても身体がプルプル震えるだけで何も起らなかつた。

真っ白な空間で中腰でよくわからない俄か拳法の構えをした成人男性が、数分間プルプル震えながら力む姿はさぞかしシユールだつただろう。

氣や魔力は後々練習するとして、身体能力がどれだけ向上したのか

を調べることに切り替える。

先ず腕力。何か持ち上げてみようと思い神様が座っていたソファーに手をかける。

真っ白い空間に無駄な存在感をかもす、黒革張りの大人三人はゆつたりと座れる高そうなソファー。

横幅があるため、力自慢の人でもバランスが取りづらく浮かせるくらいが精々だろう。

前の俺なら引き摺るだけで精一杯だ。

先ほどの氣や魔力の失敗もあり、何も起こらなくても恥ずかしくないよう背もたれ側から底の部分に手を入れ「軽く」力を入れ持ち上げてみる。

「よつ・・と?」

手のひらや腕にはそれなりに重みがある物を抱えている感覚がある。しかし自分が腕に込めている力は空のダンボールを持ち上げている程度しかない。

恐る恐る右手をソファーの重心に当たるような場所へ滑らせ左手をゆっくり離す。

まあつまり、右手一本で成人男性では抱えられないソファーを持ち上げているわけで・・

そこからなんとか指を一本ずつ浮かせていく・・

最終的には人差し指だけで、イタリアンのシェフがピザ生地を浮かせ回すようにソファーをクルクル回転させいる俺がいた。

「俺！自分が怖いっ！！」

「何だか自分に秘められた力に戸惑い、恐怖する主人公みたいな台詞だねえ」

いや、もう有り得ないくらいの身体能力だわ。

あの後も神様が戻つてくるまで自分の身体能力を確認してみたのだが、もう異常事態のオンパレードだった。

指先でソファーアームを回していたが、バランスが崩れ床に落としてしまった。

その時に「ズドン」と決して軽くない物体が落ちた音がするものだから流石に顔が引きつった。

腕力が上昇しているのだから脚力も同じように上昇しているわけで。爪先をソファーの下に引っかけてリフティング感覚で蹴り上げたら、10メートルくらい上までソファーアームは吹き飛び落下して大破。

壊れたソファーアームの残骸から握り拳大の破片を取り出し、遠く投げたソレを走って追いかけてたら、落下する前に悠々とキヤッチ。

今度は思いつきり遠くへ投げてみたら弾丸のような速さで飛んでいき、またソレが数キロ先まで飛んでいつているのにしつかり視認出来ている事実に今度は顔が引きつるのではなく強張った。

意識しても表情筋が動かないこともあるのだと学んだ。

そして冒頭の一幕。

どうせ一人しかいないのだと開き直つて思いつきり技名を叫んでみた結果・・

『『かああいいおううけええんん！－！』ってやってみたんだねえ』

「お願いだからつ言いわないで下さいつ……」

今度はしつかり発動し、強化された脚力で蹴つても傷付かなかつた床が発動した瞬間ひび割れた。

更にはよくみたら薄赤い陽炎みたいなものが身体を覆つていた。

この状態で何かを試す勇気はなかつた・・・

「いくらなんでもびっくり超人過ぎますよつー？こんな身体能力のキャラクター、ドラゴンボールの世界でしか適応出来ませんって！？よくある原作破壊なんてレベルじゃなくて漫画の世界そのものを破壊しちゃうでしょつ！！？」

転生主人公が「原作のキャラの百倍強く！」とか言つてたのを見たことあるけど、お前は馬鹿かと丸一日かけて説教してやりたい。漫画のキャラクターを常識の枠組みで測つても無意味だとは解る。だけども、こんな不条理な人間が近くに居て巻き込まれたら絶対死人が出る。

今の俺が本気で街中を疾走したら戦車がF-1並みのスピードで走り回るのと変わらない。

これで本当に制限されているのだろうか・・

「それは勿論。今の君は本来秘めていた力の百分の一以下。確実に弱つちくなつてているよ。地球に来たばかりの頃のベジータより少し上程度だねえ」

つまり一人で地球を滅ぼせるくらいつてことじやないか。

日本沈没なんて片手間で出来そうだ。

地べたに座り頭を抱える。

死んでから俺は何回頭を抱えたんだろう。

最強チートはいらなーって言つたじゃないか・・

「力に自惚れられるのも頂けないけど、力で鬱病になられるのも困るねえ。

まあ心配しなくてもその内馴染んで上手くコントロール出来るはずだよ」

楽しそうに笑いをかみ殺しながら話す神様。

どうでもいいけど貴方ニヤニヤ笑いが標準装備じゃなかつたのだろうか？

長々と独り語りしていた時もそつだつたけど、この神様もキャラがブレてるようと思える。

人としての軸がうどんかなんかで出来てそうな俺が言つのも何だけど。

「ところで、僕が戻ってきたということは転生の準備が終わつたってことなんだよね。もういつでも行けるけど君は準備出来た？」

そういうえば神様は何かしらの調整に行つっていたのだったか。

正直、心の準備も身体の準備も万全とは言い難い。

魔法に至つては試してすらいない。

かと言つて、時間をかけてもこれ以上どうにかなるとも思えない。
・・なるようにしかなるまい。

立ち上がってズボンのお尻を手で払つて神様の向かい合わせになる位置につく。

「不安はありますけど、此処に居るのも落ち着かないし・・転生お願いします」

真っ白な空間に長居するのは俺の薄弱な精神に良くない。

神様にも悪い・・・「そうだねえ。ソファーも壊されちゃつたし」からね・・

弁償しろとか言わないよな。死んでるから財布とかないよ俺。

「転生しちゃうと僕と会えないからねえ。聞きたいことがあるなら、これが本当に本当の最後だよ」

弁償は大丈夫かな。

どうせ考えが読まれるのだから心の中で謝つておく。

あと聞きたいことか・・・

「転生先は日本とか外国とかつて分かります? 最悪でも言葉くらいは通じて欲しいんで・・

あと俺の他にも転生していく人つてありますか?」

「君の転生先は日本だよ。現代の日本語で問題なく通じるよ。あと君の行く世界は君一人受け入れるだけでキヤパがいっぱいだからねえ。これ以上の来客はお断りだつてぞ」

少しホッとした。神様相手だと言葉がなくてもコミュニケーションがとれるから安心していたけれど、生まれ変わった先で言葉が通じないのはかなり困るだろうから。

それに他の転生者がいないのも安心要因だ。

俺がしたいことは俺なんかとは違う格好いい原作主人公達の活躍を見たいだけ。

原作に介入したり破壊したりするのは御免だし、他の転生者に滅茶苦茶にされるのは困る。

かといって敵対なんかしたくないし、平和的に無難に過ごせるなら万々歳だ。

「有難う御座います。もう確認することもあります。
何だか色々迷惑かけてしまい申し訳ありません。
これからは自分の力で頑張っていきます」

「・・・うん。どう致しまして。今の言葉も本心からだねえ。
自分で言うのも何だけど、神様なんて胡散臭い存在とともに向き
合つてくれた君にはそれなりの好意をもつてたよ。
暇を持て余した神様の遊びに付き合つてくれて有難うねえ」

「俺とは遊びだったんですね？」

互いに軽口を言い合い笑いあう。

俺の表面を無視して内面を散々荒らしてくれた存在だが、本心をさらけ出して会話したのは本当に久しぶりだった。
厳しいし容赦もないけど楽しかったと思うし嬉しかったとも思う。
だから自然と感謝することができて頭も下げられる。
もし自分を変えることが出来たら、本心を打ち明けられる友達を作ろう。

生前より少しでも真っ当な人間になれるよう」。

「じゃあ送るねえ。

君の新たな人生に幸多からんことを。

前世の最後の友人として君に神の祝福を」

んなこと言うなよ・・泣きそうになるだろうが。
ゆっくりと俺の足元から光に包まれていく。
では行つてきます神様。

「あー、最後に一つ訂正しておくれえ」

なんだるひー。

今うつすりと涙目な上、思いの外光が眩しくて目がチカチカしてる
んだけど。

「最初に見せたあの映像なんだけど。三時間半もないよ。

精々一時間ちよい。

何でそうな風に思ったのかしらないけれど、君が時間が解るとかこんなおかしなことあるかーとか痛い勘違いしてたのが気になつたねえ。

そこまで指摘するのも可哀想かなつて思つて話を合わせて黙つていただけど、言わないままだと僕がスッキリしないから伝えてくねえ。

次の人生じゃそんな痛い思い込みや勘違いはしないよつて誓をつけねえ。

そんじやねえ！バイバーー！

言いたいことは山ほどあるし、ツッコミたいことも腐る程ある。

強化された身体能力のフルパワーでぶん殴つてやりたい気持ちだつて溢れんばかりだ。

もう光が身体全体を覆い隠そうとしており、強い光で目を開けることも出来ない。

光の向こうにあの「ヤケ面」があるかも解らないし、俺自身がすでに消えている可能性もある。

それでも・・

届かないとしても・・

伝えたいことが俺にだつてあるんだ！

「お前の『ね』の時だけ語尾を伸ばす話し方だつて十分痛々しいだろうがああっ！――」

意識が薄れゆく中で俺、次の人生では『ちゃんとしたまともな友人を作ることを決意した。

第四話・人生再出発（後書き）

やつと転生です。

と言つても転生先についてすらいないのですが・・・

主人公の身体能力は転生後一旦低下させます。

初つ端からアレでは流石に・・・

でも一般人と異能者の境目辺りにいる古とか頭一つ抜け出してる楓
や刹那だつて無茶苦茶な身体能力ですよね。

強すぎないくらいってどれくらいの能力なんだろ？。

主人公は最後まで名前も容姿も描写されなかつたなあ。

ちょっとくらい描写しようか迷つたんですけど、どうせ転生してからが本当のスタートなら今は要らないだろうと結論付けました。

無色透明な主人公と外見無しみたいな神様との絡みだけ。
自分でもラジオを聴いてるような文章だと思いました。
色々な意味で真つ白な世界です。

切実に文才が欲しいです・・・

11 / 22

主人公の能力に合わせてタグを少し追加しました。

第五話・もう挫折（前書き）

漸く、漸く物語に入ります。

今回は独自解釈、独自設定が入ります。
説明ばかりが続き文章量も多いです。

挙げ句、かなり展開が無茶苦茶です。

文才は・・文才はどうしたら手に入るのですかっ！？

第五話・もう挫折

「蓮！蓮は何処にあるかっ！！

今日をなんと心得ておるー我らが大願成就の日ぞ！

己の役目もこなさずまた下らんことに時間を費やしておるに違ひないわー！」

貴様等もまほそつとしどらんと、あの愚か者を儂の前まで引っ立てこんかっー！」

「か、かか畏まりましてつー！」

長い白髪を後ろに流し、首の辺りで一本に纏めている強面の老人が烈火の如く怒鳴り散らし、床を踏み鳴らしながら力任せに襖をバンバンと開け放っていく。

いや俺の実の祖父なんだけどね。

女中さんや護衛の男性を射殺さんとばかりに睨み付け、怒声の勢いで『蓮』なる人物を探すようにあちらこちらへと遣わしている。

いやその蓮くんが俺なんだけどね。

神様と微妙な別れを終えて、眩い光の中で氣を失い、次に目が覚めた時には此處『秋山家』の長男として生をうけていた。

自分が『秋山 蓮』として自覚したのは一歳を過ぎた辺りで、もしかして『転生』ではなく『憑意』してしまったのかと思い、えもい

われぬ不安に襲われたりもした。

幸いにも一歳頃の記憶が朧気があり、『秋山 蓮』という人物をのつとつたのではないと分かつて心底安心したものだ。

流石に元々いた人から居場所を奪う真似はしたくなかったし、転生早々新しい罪悪感を芽生えるのも勘弁してほしかった。

転生後、最初に行つたのは自分の姿を確認することだつた。

日本人として生まれたのは理解出来たが、転生オプションなんかで銀髪だつたりオッドアイだつたりしたらその時点で引きこもり生活になつていただろう。

鏡に映る黒髪黒目の中の幼児の姿にこれまたほつとしたものだ。

因みに俺こと蓮くんは、利発そうで大層可愛らしい顔をしている。自画自賛の幼児なんて氣色悪いと自分でも解つてゐるが、それなりに整つた容姿に生まれたのは素直に嬉しいと思う。

容姿と言えば、最近は生前の自分の容姿や名前が思いだせず、どんな生活をしていたかもあやふやになつてきている。

秋山蓮という存在が自分と重なり合つていく過程で薄らいでいつたのかもしれない。

いずれは自分が転生者だという記憶もなくなり、この世界の一員として埋没していくのだろうか。

未だにこの世界では俺はイレギュラーだという考えが捨てきれないからこのような思いに囚われるのだと思う。
たかだか数年で馴染めというのが無理なのかもしれない。

とまれ色々と悩み事が絶えない秋山さん家の蓮くんだが、せっかくの新しい人生なのだから、明るく楽しく健やかに育つていこうと思つていた。

が、この秋山家。

実に厄介極まりない家柄だったのだ。

俺という自我が確立されてからは、自分がどんな世界で生きていってどんな人物なのかを把握する為の活動を始めた。

よちよち歩きで屋敷内を回り、書籍関連や郵便を盗み見したり、女中さんや側付きの護衛さんの話を盗み聞きして情報収集明け暮れた。そこで解つたことは、秋山家が関東でも有数の名家「だつた」という事実。

・・まあお察しの通り、秋山家はかつての隆盛の陰が無駄にでかいお屋敷の所々に見られるだけの没落華族でしかなかつた。

別にそれだけならまだいい。

この平成の世に華族だ名家だなんて何の足しにもならないんだし、いずれ俺が家督を継いだ時にはこの無駄屋敷を売つぱらつて適当なアパートに住むつもりでいるのだから。

大体この屋敷の維持費や人件費を想像するだけで頭が痛くなる。貧乏性というなれ。

小心者には居るだけで苦痛になる空間が多いのだ。

まあ没落華族云々はこれくらいにしておく。

問題なのは秋山家のもう一つの顔。

裏の顔こそが一番の大問題である。

それを初めて知ったのは俺の3歳の誕生日であり、俺『秋山蓮』の産みの親である母の命日にあたる日だった。

俺の母は病弱だつたらしく元々出産に耐えられる身体ではなかつたらしい。

母が自分を産んだせいで死んだというのはショックだつた。

俺はこの世界でも人を殺してしまつていると知り、顔面蒼白になり膝から崩れ落ちた。

文中さんが呆然している俺に何やら話しかけている中で、隣に立っていた俺の爺さんが「お前を産む役割を果たしたのだから元々用済みの女よ。お前も些事にどうわれず、その才能を余すことなく秋山の為に使えよ」という言葉と共に笑いながら去つていくのを見て我にかえつた。

元々人間形成に問題のある俺だが、家族に負い目はあつても悪感情を抱いたことはなかつた。

それは生前の家族が普通の人達であり、一般的な愛情を俺に与えてくれたからに他ならない。

少なくとも今時ドラマの題材にすらならないような名家にありがちな妾執に憑かれた老人やそれの犠牲になる人がいることと関わる人生ではなかつた。

今生の俺の唯一の家族は俺以上に歪んでいた。

その事実もまた俺の心に暗い陰をさす要因になつた。

唯一の家族と言つたことで、これまたお察しの通り、俺の父親も既に故人だ。

昔、何かで負つた傷がもとで、母が逝つたあとで追うように他界したらしい。

通りで自我が形成された時に両親の記憶を探つても見つからぬわけだ。

前世と今生を合わせどちらの両親にも何も報いることが出来ないらしい。

自分が関わっている人達が不幸になつていてることが辛い。

自分が転生しなければ良かつたんじゃないと自問自答を繰り返すのがそれからの日課になった。

ああ・・思い出せば出すほど生きているのが辛くなる。
それでも嫌な思い出だけは鮮明に思い出せるのだから余計陰鬱な自分から抜け出せない。

母と衝撃的な初遭遇したその日の夜。

普段は俺と一緒に食事をとることすらない爺さんが、黒塗りの高級車に俺を乗せこれまた無駄に立派な料亭？でいいのかな。とりあえず皇族御用達みたいなところへ連れて行つた。

都内に京都の観光名所みたいな手入れされた庭が見える座敷。
そんな庭の眺めながら長い廊下を歩き、案内役の女性からやけに静かな一室へと通される。

爺さんに続いて中へ入ると、左右対象に並べられた御膳と左右対象ではないものの明らかに一般人ではなさそうな人達が座して俺達を出迎えてくれた。

この時俺は「ああ、俺は没落華族の跡取りで裏家業を取り仕切る頭取みたいな人物の後がまでもあるのか」なんていよいよ困惑と嫌悪感の最高潮を迎える、自分の人生にいつ終止符をうつべきか本気で考えていた。

爺さんが上座中央に座りその隣に俺を座らせる。

まるで見せ物だ。爺さんもきっとそのつもりなのだろう。
周りからの視線を受ける俺を眺め、厳つい顔をとも血運げに歪めていた。

俺の困惑も嫌悪感も知らうともせず。

俺も俺で弱気なところを見せないように、無表情ながら視線は真正面を見据え、背筋をピンと伸ばした綺麗な正座を保ち続けた。

誤解のないよう頼むけれども、決して爺さんの顔を立ててるわけじゃないのであしからずご了承の程を。

理不尽な爺さんに舐められない為の3歳児にできる精一杯の虚勢なのだ。

3歳児であっても外面を取り繕う技術は十全と言えよう。
流石は俺だ。こんな風にならないように転生したのに全く変わっていない。

神様に語つたあの時の思いが急速に褪せていくを感じる。

外面とは裏腹に内面は絶賛闇へと沈下中。

左右に座す人達からも視線と共に「秋山の御子」とか「莫大なる魔力が・・」とか「稀代の術士に・・」とか胡散臭い言葉が途切れ途切れに聞こえてくる。

断片的な言葉からだけで推測しても、裏は裏でもオカルト的な裏家業だというのは間違いないだろう。

これで違つてたら、ここに居るのはイイ年したオカルトマニア達で、この集まりは痛いマニア達のオフ会になる。

なんて嫌な空間だ。

神様空間より酷い。

陰鬱に暗澹とした気持ちも加わり、正座を保つのも限界近く、瞼も重くなってきた。

3歳児の身体では夜更かしが出来ないので、生理現象が大人より強く現れるのを実感する。

別にそんな俺に気付いたわけではないだろうが、隣の爺さんが立ち

上がり、実際の年齢より張りのあるよく通る声を上げる。

「今宵の余合に集まつてくれた皆に秋山家当主として感謝する。此處に居る者は皆一様に西洋に対し苦渋を飲まされておりう。我らが國土に不相応にも居座り、我らが永きに渡り護り崇め奉つてきた神樹を掠めとるという暴挙ともいえぬ愚劣極まりない所業にまで及んでおる。

更には皆の記憶にも新しかろうかの大戦にて、我らが同胞、我らが家族、そして我らが名誉を汚し喪わせた。

儂の子も大戦に駆り出され、愚鈍な西洋の愚物に狗のように扱われその際の負傷がもとで命を失つた。我が秋山の由緒正しき血脉を我が國の呪術の礎たる血脉の一つを絶たんとしたのだ。儂は決してあの下衆共を許さぬ。

西洋の狗畜生共をこの国から追い出さねばならぬ。

それだけではない。

西洋に恭順し誇りを失い狗に尾を振る裏切り者共も排除すべきなのだ。

唾棄すべき塵共だ。

奴らに我らが味わつた屈辱を億倍にして返し、我らが流した血涙を毒と共にのませてやうつ。

雌伏の時はいざれ過ぎ去る。

何故ならば、秋山家開祖以来触れられる者の居なかつた『神殺しの神剣：天之尾羽張』^{アメノオハカリ}を手に取る者が現れたのだ。

それが我が孫である蓮よ。

秋山に御子が降りたのだ。

神代の頃より語り継がれる神剣と日本呪術の直系の一つである秋山の麒麟児が揃えば西洋の愚団共は木つ端の如く散らされよう。

皆よく聞け。我らは必ず西洋の魔法使い共を地獄に叩き落とすであらう。そしてその時はもう間もなく訪れよう。

皆その時を地に伏せ、陰に隠れて待つのだ。奴らを血祭りにあげる

その時まで。

皆の願いは儂の願い。
思いは同じぞ。

今宵交わした誓いは必ず果たそう。
儂と蓮は皆の変わらぬ忠誠を信じておる。

これからも我が秋山家共に守つてこよう

爺さんと集まつた人達の「秋山家万歳」「関東呪術一派万歳」を俺
は舟を漕ぎながら聞いていた。

そして夢現に一つの解答に辿りついていた。

「ああ、これ多分『ネギま』だと」

とまあ突っ込みどころ満載の「『関東』呪術一派」の皆さんとの会
合の思い出を振り返つていたらドタドタと床を踏み鳴らす音が近づ
いてきたことに気付く。

俺の後ろの襖が外れるんじやないかと思つくりいの音を立てて開き、

騒音の張本人が鼻息荒く俺の側までやつってきた。

「蓮つ！…貴様という奴は今日が何の日か知つておろうがつ…！」

「御爺様、その様に怒鳴つてはお身体に障ります。お医者様からも血圧が高いことを指摘されておられましたでしょ？
そう言えば処方された薬をまた捨てられたそうですね？いけません御爺様。

病気の再発や悪化の背景には薬の飲み忘れや服用の中止が理由であることが多いのです。お医者様を盲信せよとは申しませんが、素人判断で治療を中断せずお医者様と相談なさつた方がよいかと愚考する次第です。

ああ、なんでしたらセカンドオピニオンというのも・・・」

「喧しいわつ！下らぬことをべらべらと宣いおつて…！
そんな話をする為に来たのではないわ！」

儂らにとつて今日がどれほど大事な日か忘れたとは言わさんぞ…！
「ええ、ええ。存じ上げておりますとも。

しかし御爺様。御自身の健康の為の話を『下らぬこと』と言つて捨ててはいけませんよ？

私のような若輩が御爺様のような方に苦言を呈するなど不遜な行いであると理解しております。

しかし私の親族は御爺様ただお一人。

御爺様の身に何か良くないことが起こり、私一人になつてしまつたらと思うと胸の内に不安が波のように押し寄せてくるのです。

御爺様、どうか愚かな孫の願いを聞き届け、治療に専念なさつて下さいませ」

「そんな話はどうでもよいと言つておるのが解らぬかっ…！」

大体藥ならば我が配下の医療術士が用意した秋山家秘伝の妙薬があ

る。」

「ああ、御爺様それはいけません。

代々家に伝わる秘伝の万能薬等というものは大半が怪しげで不確かな物が殆どなのです。

滋養強壮、栄養補給といった類いの物ならまだ良し。なかには荒唐無稽な代物が御座いまして、先日私が訪問したお宅の年配の男性は万病に効くと言つてなんと御婦人用の薬を常用なさつておられました。

微笑ましい話とも取れますか、裏を返せば正しい治療がなされておらず、知らず知らずに病を増悪させてしまう恐れがあるのです。聰明な御爺様ですから私の申したいことなど既に把握しておられるでしょうが、敢えて進言させて頂きますと、そんな怪しげな薬ではなくお医者様のもと、適切な治療を受けるべきなのだと再度お勧め致します。

ああ、そうです。私が病院へ診察の予約をとつて参りましょう。
『善は急げ』という先達の言葉もあることです。

では私が病院へ電話をしている間に御爺様を外出用のお召し物にお着替え下さい。あと女中のお花さんにハイヤーを屋敷の前に回すようお伝えしないといけませんね」

「その要らぬことしか言わぬ口を閉じんかつ！

大体由緒正しき秋山の妙薬を怪しげとは何事かつ！――

今日は！――今日は儂らが悲願を果たす為の大切な・・・

「御爺様。今日が大切な日であることなど重々承知しておりますとも。

だからこそ私はこの場に居るのでありますよ？」

「そ、そうなのか？分かつておるのだな！？それならば・・・

「ええ、今日は『母の命日』で『私の十二歳の誕生日』ですよね御爺様」

それだけ伝えて仏壇への合掌を終え、隣りで呆けた顔の爺さんに微笑みかけながら耳元でボソボソと囁く。

病院へ電話を入れる為に退室し、爺さんが開けたままにしていた襖を通り後ろ手でぴつちりと閉める。

背後で『何か』が倒れるような音を確認して足早に立ち去る。

携帯を片手に屋根の天辺まで一足で飛び上gar」とて屋敷内の面倒事から逃げ出した。

はい、改めてまして自己紹介を。

秋山蓮、十三歳！

麻帆良学園男子中等部一年生！

クラスでは保健委員をやっています。

部活動はせず、週に一、二度ボランティア活動に参加しています！

趣味は勉強。

将来の夢はお医者さんになることです！

心にもないことを心が動く前に口に出す。

内側と外側がちぐはぐでバラバラで。

心にもないことを心が動く前に口に出す。

相手が言いたいことをはぐらかし。

聞きたいことを煙に巻き。

かと言つて相手を納得させることもしないし理解を得ようともしない。

好かれようと明るく振る舞い、好かれても常に同一な態度と姿勢と表情で一定以上には近よらせない。

見掛けは全て誤魔化しで見せ掛け。

着飾つていののはずつと着続けて草臥れた嘘の自分。

そして心中は常に後悔と悲嘆と諦観で溢れ。

思考は常に後ろ向きで卑屈で逃げ腰で埋まっている。

そんな歪な存在に俺と私は成りました。

屋根の上で「御爺様が倒れて意識不明なんです！救急車をお願いします！」と慌てふためく演技をしながら住所を伝えて電話を切る。携帯電話を制服のスラックスのポケットにしまう為身を捩る。その動作で生じる僅かな体重移動でも屋根の瓦がカタカタ鳴る。4月中旬でも曇天で少し風がある日では肌寒く感じる。制服のジャケットは部屋に掛けたままなので、カッターシャツ一枚では屋根の上はちょっと辛い。

「せめてセーターくらい着とけば良かった」

嘆息しつづく。

ずっと前から独り言が癖になってしまった。

「神様。俺やつぱり駄目だったよ

3歳時の御披露田の日から、俺は自分の修正が追い付かなくなつていつた。

爺さんの秋山家の秋山家による秋山家の為の演説のあと、大人達が「蓮様！蓮様！」と殺到してきた。

眠くて仕方ないのに

「蓮様お菓子をどうぞ！」「蓮様ジュースをどうぞ！」「蓮様果物をどうぞ！」

と矢継ぎ早に差し出される食べ物で俺の御膳は滅茶苦茶になつていた。

配慮が足りないといふか空氣の読めない関東呪術一派という集団は、世界樹のある麻帆良を攻め落とし、西洋魔法使いを追い払い、再び自分達の手に世界樹と関東の魔法呪術関係の実権を取り戻すが目的らしい。

らしいというのは、関東呪術一派が『一派』と言うだけあって一派閥の弱小団体でしかなく関東呪術師全体の総意ではないからだ。関東にもそれなりの大きさの呪術関係の団体はある。

それでも関東一帯の魔法や呪術関係を仕切っているのは、麻帆良にある「関東魔法協会」であり、関東の数多の派閥、団体の大本である関東呪術協会もその傘下になつてている。

傘下にいるとはいえ呪術協会も好き好んで従つてはいるわけではない。

江戸幕府から明治、大正、昭和と国政の中心であり、国の象徴の住まう帝都でもあつた関東一帯の呪術守護は重要な役割だった。本家京都の関西呪術協会とは仲良しこ良しな関係ではなかつたが、日本を守護するという役割を互いに理解し組織ぐるみで協力し合える間柄だつた。

これは俺個人の解釈だが、呪術協会は関西がお兄ちゃんで関東が弟。お兄ちゃんは長いこと仕事をしてきたから実績があつて本社の京都勤務。

弟は仕事始めは遅かつたけれども、一番大きな仕事を抱えており、社長（国政機関）や会長（天皇）の覚えもいい。

同じ会社（日本）に勤めているから、業績で負けたくないけど敵ではないし、会社を守るなら力を合わせることも出来る。それなりの関係で上手くやってこれではいたのだ。

その関係に亀裂をいれたり事態をややこしくしてくれたのが、西洋魔法使いを中心とする魔法協会。

日本有数の神靈地である世界樹を含む一帯を選挙されるわ、魔法世界の大戦で召集令状よろしく呪術協会の面々も駆り出されボロボロにされるわで、呪術協会は疲弊しまくつたのだ。

特に魔法協会と距離的に近しかつた関東呪術協会の有り様は酷かつた。

徴収された人員、物資は同じ量だったとしても関西とは組織の規模が違う。

組織の体裁をギリギリ保てるかどうかという力しか残つてなかつた

関東呪術協会が存続する為の選択肢は少なかった。

関西に吸収されるか魔法協会に降るか。

関東から呪術協会がなくなれば、関東一円は魔法協会に独占される。魔法協会に従えば、それは事実上敗北宣言となる。

じゃあ魔法協会と戦うのかというと、魔法協会のバックにはメガロメセンブリアという魔法国家が存在しており、たかが一組織のかなう相手ではない。

困窮し疲弊しきつた関東呪術協会内では意見が割れに割れて、それを收拾できるような有能な人材を多数失ったこともあり、組織内の対立や派閥化が進行。

結果、関東呪術協会は瓦解する。

あとは分裂なり独立なりした各派閥や団体がそれぞれ独自で行動する。

吸収されたり、恭順したり、反抗したり。

で、今に至るわけである。

俺は御披露日後は呪術や魔法について大っぴらに触れられるようになり、秋山家にある術書や魔道書も読み放題になつた。

そこで関東呪術協会の文献を見つけ、大まかな組織の変遷を知つた時は、関東呪術協会の悲惨さに泣きそうになつた。

関東魔法協会についた団体は、国内から白い目で見られ売国奴扱い。

関西呪術協会に庇護を求めた団体は、関西の下請けの下請けの更に

更に下請けの町工場の従業員扱いの上、関東を守れなかつた連中だと見做され肩身が狭い。

反抗なんかした団体は、その殆どが壊滅。

個々で活動する小規模団体の中には、汚い仕事を主とする半ば犯罪組織みたいなものに成り下がつたものもある。

当然そんな輩は嫌われ者である。

そして俺はその嫌われ者と壊滅した組織の生き残りで構成された弱小派閥の代表候補。

俺涙目である。

更に付け加えるとその関東呪術一派は、時勢に乗り遅れた間抜けや偉い人に脳みそ預けっぱなしの馬鹿や古き慣習と家柄に縛られた阿呆ばかりで、もう終わっちゃってる人達の集まりなのだ。

そしてその殘念一派は麻帆良、ひいては西洋魔法使い全体に対して抗争を仕掛けている。

この俺を旗頭にして。

俺号泣である。

転生補正というべきか、俺は生まれもつた魔力がやはり桁違いらし
い。

生まれた際にそれを感じとつた爺さんは、出産後容態が悪化した俺の母親に目もくれず、俺を抱えて屋敷の最奥まで走つていつたらし
い。

そこに奉納されていた神剣『天之尾羽張^{アメノオハバリ}』に新生児の俺がを触れられたことに狂喜乱舞。

「秋山開祖の再来」と狂笑し続けたとか。

『天之尾羽張』は故事神話の世界の代物であり、実際に存在するものではない。仮に京歩譲つて本物が存在したとしても人に御せるモノではないのだ。

アレは神剣であり神の一柱。神殺しの刀で神殺しの神である。そんなモノをたかが呪術師如きにどうにか出来る訳がない。そういうわけで、秋山家開祖が何を思つて刀にそんな大層な銘をつけたのか知らないけれども、特定の人間以外は触れられない呪い付きのパチ物であることは間違いないだろ？
赤ん坊になんて物を触らせやがるんだ爺さん。

話がちょっと逸れたけど、凋落著しい秋山家と関西呪術一派にとって、俺という存在は状況を逆転させらせる鬼札と考えられている。幾ら魔力が高いからといって幼児を利用するなんて呆れた連中だ。
それからといふもの、俺は爺さん達から歪んだ洗脳英才教育が行われた。

『西洋魔法使いは悪』という爺さん達の怨敵であるメガロメセンブリアの元老院も真っ青な視野狭窄の閉鎖環境に追い落とされたのである。自分が転生者でなく普通の幼児だつたらどんな成長を遂げただろうと想像すると薄ら寒いものがある。

二次創作やなんかで子供先生の歪さや不自然さが強調されているが、自分が同じ立場になつてみるとあの程度の歪み方なのがすごいくらいだと思える。

父親を追うという信念があるとはいえ、ひたむきさを失わず純粹さを忘れないのは驚異だ。

なんだかんだで流石は主人公。やはり俺みたいな奴とは違いますぎる。

また話が脱線してしまった。

ともあれ、俺の方は自分の歪みを矯正して真つ当な人生を送るどころか、俺以上にぶつ飛んだ大人と環境に囮まれ、見事更正に失敗したのだった。

爺さん達にとつて都合のいい存在を演じながら、能力に磨きをかけ。爺さん達の思想と疑惑に乗つた振りをしながら、自分が生き残る為の逃げ道を模索し。

爺さん達と秋山家の栄光を取り戻す夢を適当に語り誤魔化しながら、俺の人生の障害になりつるものを排除する為の準備を整ってきた。

そして去年、爺さんの命で敵である麻帆良学園に潜入するため男子中等部に入学させられ。

晴れて一年生になったこの日、俺の準備と関東呪術一派の準備が全て整つた。

妄想と妄執を高らかに掲げ、猛然と猛悪に突き進む、盲目と盲信の天の下へと続く道。

正道を外された者共が辿る道は、いつだつて地の底にしか続いていない。

さあ滑稽な三文芝居に興じよつ。

外道共よ。満願成就の時がきた。

「もしもし。ガンドルフィー二先生ですか？

私は。男子中等部一年の秋山です。

お忙しいところ申し訳ありません。

お話ししたい事が御座いまして、お時間を頂きたいのですが今の時間は大丈夫でしょうか？

有難う御座います。

それでお話ししたい」との内容なのですが・・
ええ、そうです。

お察しの通りです。

先生は若輩者の私のことなどお見通しなのですね。

ということは周囲の人払いもお済みで？

流石先生です。私などが気を回すまでも御座いませんね。

そんな、とんでも御座いません。私など未熟で浅薄な若僧でしかありません。

先生のお心遣いに深く感謝致します。

ああ、いけませんね・・先生からの温かいご配慮に甘え、肝心の内容をお伝えすることを失念しかかりました。

自身の未熟さに辟易してしまいます。

では・・

彼等は今宵、かねてよりの計画を実行にうつすようです。

学園の春休みに合わせ極力一般人を巻き込まないように考へ、人扱いの呪付も大量に用意はしているようですが。

そもそも、このような暴挙に出ること自体、他者の安寧を齎かすことになると何故気付くことが出来ないのでしょうか・・すみません。自身の不甲斐なさが悔しく感じまして・・

いえ、私も彼等の暴挙を止めれなかつたのです。同罪であると思つのです。

力がなかつたことなど言い訳になりません。

私自身にもう少し力があれば、先生方のお手を煩わせることもなかつたのにと。

悔やんでも悔やみきれません。

・・今は嘆いている時ではありませんね。

彼等は日が落ちる頃には秋山の屋敷に集まる手筈となつています。そこから麻帆良の結界を中から私が崩し侵入。

魔法先生、生徒を強襲し捕縛または暗殺しつつ主要施設を占拠。彼等が狙うのは先ず学園長や先生などの戦力です。

本来の目的は世界樹だつたのでしょうか、今や妄執に取り憑かれた彼等は、西洋魔法使いへの直接的な報復を望んでいるようです。

恨む理由があつたかもしませんが愚かなことです・・

彼等が麻帆良に辿り着く前に捕縛するべきなのでしょうが、秋山の屋敷は呪術で守護されており攻め入るのは危険ですし、もしもの時の逃走経路も御座います。

移動中に確保するのも何人か取り逃がす恐れがある以上やめておく方がよいでしょう。

ですので私が彼等を学園内に侵入させたところで彼等の周囲に捕縛用の呪を施します。

私程度でも数分は保たせられかと思います。

先生方は離れた位置に潜み、私が合図をしてから駆けつけて頂きます。

・確かに私の身は危険に晒されます。

先生方が来られるまでに私の呪が破らないとも限りません。
しかしこれは私の役目なのです。

彼等を諫めることができず、愚かな行い起こさせる要因となつた私の贖罪なのです。

事態が収束した後は私も彼等と共に裁きを受けるつもりです。
いえ・・いいのです。私も彼等の一派ですから。

私は正義の協力者ではなく、ただの裏切り者なのです。
ですからガンドルフイー二先生が私なんぞにお心を碎いて頂かなく
てもよいのです。

そのお言葉だけで私は十分救われております。
どうか正義として正しい裁量を為さつて下さい。
どのような結果でも甘んじてお受けします。

学園長や他の先生方にもお伝え下さい。

侵入経路と場所、私と彼等の到達予測時間については、判明次第、
式を飛ばし通達致します。

恐らく電話をすることは難しいでしょうから。
では夜にお会いしましょう。

失礼致します」

第五話・もう挫折（後書き）

原作キャラが名前だけですが初登場です！
やつたー！！

そして主人公も名前が出ました。

容姿についてもちょっとだけ描写されました。
ちょっとだけだからキャラの輪郭が未だにふわふわしますが。
内面もふわふわしてるし外見も適当でいいかなあと思つたり。

主人公は呪術関連を幼少時から叩き込まれ、普通の術士と同等程度
の能力はあります。

転生時に付与された能力については、適当に誤魔化しながら使つて
いくと思います。

主人公はなんか色々諦めちゃってるからおかしな技や術を使うこと
がバレても

「別にどう思われてもいいや、面倒臭い」
とその場をしのげたら良し。しぶしぶなからずから諦めて流れに任せ
といった思考です。

最終的にキャラがどこに着陸するのか私にも不明です。

第六話・後の祭り（前書き）

とつあえず投稿できるひがに、バンバン出してこまます。

「ネギホー」って可愛らしい女の子がこいつぱこでぬ咲じやなかつたっけ？

第六話・後の祭り

懐かしい独特的の空気感と匂い。

ある種の隔絶とされた世界。

ここに住人であることを示すような統一された服装の人と、外界から入ってくる一般的な洋服の人どが互いを意識しながらも注視しないことが暗黙の了解であるかのようにすれ違う。

見ることが失礼。

意識することが無礼。

何に対する引け目かはわからない。

潜在的な忌避。

一般人であつた自分が一般的に振る舞う術を奪われたかのような住人達。

淡い色合いの壁と床。

決して清潔になんかならないのに、狂つたかのように環境を清潔にすることに拘る空間。

安全と安心と安楽を提供する癒やしの場。

不安と不自由と不吉を突き付けられる生死の境界。

俺が人の全てを犯し奪い踏みにじつた罪悪の現場。

実態を知らない人から天使扱いされる白衣の職員に目的の部屋を確認し、妙に粘つくような気分がする廊下を歩く。

部屋の番号とネームプレートに表示された名前に間違いがないことを確認して数回ノックする。

向こうからの返事がないが「失礼します」と入室する瞬を伝えドアノブを捻り扉と身体と一緒に前に押し出す。

入室する際に少し下げる頭をあげると、一度中に居た人物と目が合い思わず笑みを浮かべてしまつた。

「お身体の調子は如何ですか御爺様？」

看護師さんから伺つたのですが、お田覓めになられてから何やら妙なことを言つておられるとか？

『呪術』とか『魔法』とか。

ああ、ご安心下さい。

『祖父は迷信深く、生粋のオカルトファン』だと説明しておきましたので。

あとこの雑誌を床頭台に置いて頂けますか？

これで看護師さんも納得してくださると思います

顔面どころか全身も真っ赤になるんじゃないかと思うくらいに怒りのオーラを噴出する爺さんに、俺はそつとお見舞いの品として『ムー』を差し出した。

昨夜の関東呪術一派の計画筒抜けの復讐劇は、ものの十数分で俺

を含め関係者全員が確保された。

何年も前から今日という日を妄想してきた呪術一派の連中は、あまりと言えばあまりの結果に顔色を赤白青と実に多彩な変化を見せていた。

そこから俺のとつた行動への罵声に怒声に悲鳴が飛び交い、様々な悪口雑言も加わり聞いているのに疲弊し俯いていた俺の肩に Gandalf先生の大きな手が置かれた。

顔を上げるとGandalf先生の精悍な顔が俺の数倍は辛そうで、それでも俺のことを労るように真摯な眼差しで見つめていた。

俺は心配はいらないとばかりに弱々しく笑みを浮かべるという『自身の良心に従い、多く人々の悲劇を食い止める為に自らを過酷な状況に置いた少年』を装つ。

そんな俺を見て苦渋の表情をより強くするGandalf先生を眺めながら

『なんでこんな良い人が一次創作では割を食つことが多いのだろう?』

なんて考えていた。

関東呪術一派の連中は、俺を利用しようとしただけでなく、復讐の為の資金集めと称し、拉致や誘拐、傷害や殺人まで行っていた。事件の背景にどれだけの悲劇があるうとも、人として越えてはいけ

ないラインを軽々と踏み越えてしまっている連中には同情する気にはならない。

ましてや復讐の理由に利権や打算まで絡んでいるのだから尚更だ。連行される彼等にはしっかりと罰を与えてほしい。

しかし、かく言う俺もそんな輩と大してかわらないのだ。

犯罪行為で得られた金銭は、活動資金だけでなく、秋山の無駄屋敷の維持費はその血にまみれた金でまかなわれていた。

没落華族に権威も資産もなく、薄汚い虚榮心は更に汚れた利己主義で支える。

不快極まりないが、俺が生きて成長する為の糧はそれによつて提供され、俺はそれを知りながら

『今の自分にはどうすることも出来ない。だから嫌々だけど我慢して受け入れる必要がある。でも本心は違うんだ』

と自己弁護して、犯罪行為を諫めることも非難もせず唯々諾々と爺さんや一派の連中に従い続けていた。

結局今回の一件は、俺の良心に基づいた正義の行いなんでものじやなく、爺さん達への悪意と意趣返しであり、犯罪に荷担していたんじゃないという言い訳と、そんな状況にいることへの後ろめたさと後悔から逃げ出したかったのが理由なのだ。

その為にガンドルフィー二先生の良心と正義感を利用して、保身の為に身内を売ったという凡そ正義の主人公から程遠い行為だったわけだ。

「つぐづぐ自分が嫌いになるよ

事件の詳しい経緯の調書をとつたり証拠関係の提出などがある為、重要参考人として俺は先生方に促されるまま、星の光も街灯の灯りも乏しい、闇色に染まった木々の間をトボトボと歩き続けた。

「学園長！秋山君に対する寛大なる処置をお願いします！
彼は善良で誠実な少年です。

今回的一件も彼が私達に情報を提供し、自身が矢面に立ってくれた
からこそ、被害も出さず解決出来たんですよー？」

「わかつておるよ、ガンドルフィーーー君。

秋山少年の協力がなければ相応の被害があつたであろう」とも、彼
が提出してくれた証拠がなければ呪術一派や関連組織の犯罪行為の
立証も叶わんだとともな

「でしたらっ！？」

「それでも、彼を何事もなく無罪放免にすることは簡単にはいかん
のじゃよ・・・」

全くもつてままならぬ」とじやな。

何度もかの溜め息をつきつつ椅子の背にもたれかかる。

しづな君が気を利かせて入れてくれたお茶も手付かずのうちにス
ツカリ冷めてしまた。

今夜の一件。不遇な立場に追い込まれておつた関東由来の呪術系派閥の暴走は、その境遇を鑑みればわからんでもない。

彼等にも言い分はあるう。

じやが、その為の手段として他者を害し殺めようとするなど言語道断。

更には秋山少年の提出した資料を流し読みただけでも、儂の年齢を上回る程の犯罪履歴がある。

半ば強制的に傘下に入つたため、御しきれておらんかつた関東の呪術一門じやが、儂らの膝元でこうも狼藉三昧を繰り返しておつたとはの。

各組織への訓告だけでなく査察や直接的な指導も行わなければなるまい。

・・・いりや しばらく忙しくなるのう。

頭を抱えたくなるが、先生方の前で最高責任者がそんな態度をとるわけにもいかん。

変わりに伸ばし放題になつとる眉毛を撫でつけとくか。

さしあたつては先ず件の秋山少年のことじやな。

昨年男子中等部に入学した時から話題にはあがつとつた。

『関東呪術の名家、秋山家の秘蔵つ子』

『莫大な魔力をもつ麒麟児』

他にも色々と異名をもつておつたが、外部に姿を見せたことは数えるほどしかなく。

屋敷から殆ど出ることのない正に『秘蔵』された存在じやつた。

そんな子じやからな、そつなる理由もわかる。

儂らじよて、木乃香が生まれてからしばらくは徹底的に守護し、外部との接触は極力避けておつたからう。

莫大な魔力をもつ名家の幼子など、欲や悪意に満ちた輩からすれば利用価値に溢れた宝物に映るじゃろ。名家といつ立場も敵に事欠かんしのう。

そんな少年がいきなり麻帆良に入学してきたのじや。

そりやあ結構な騒ぎになつとつたわい。

好意的に見てくればよいが、奇異の視線や品定め、中には呪術協会の刺客という者もおつたのう。

当たらからずも遠からずじやつたがの。

秋山少年は木乃香と違い、幼い頃より呪術を学んでおつた。魔法関係者として入学することになるので、秘匿の説明を名田に儂が対面することにした。

関東秋山の秘蔵つ子にも興味があつたから。

実際会つてみるとなかなか面白い少年じやつた。

折り目正しく礼節を弁えておるし、物腰も柔らかい。

細面で丁寧に切り揃えられた髪から覗く目も切れ長で鼻筋も通つておるが、年相応の幼さの残る面差しが愛らしさを感じさせた。同年代の子と身長は大して変わらぬが、鍛えておるのだろう、細身ながら引き締まつた体格をしておつた。

「こりゃ成長すればさぞかし良い男になるわい」と感嘆したもんじや。

魔力は制御しておるのかパツと見ではわからぬが、内包しておる力は確かに強大だと感じた。

そのことを聞いたら

「恥ずかしながら制御は苦手でして、家中にあつた呪具と家の者に呪印を施してもらつて制御しているのです。

無闇に力をみせないようによに祖父に厳命されてありますしと困っているような笑みを浮かべておった。

思った以上にしっかりしており、力の有用性と危険性も把握している。

孫の木乃香とそんなに年が離れておらんのに大したもんじや。

秘匿についても十分に理解しておつたが「刑に服すのは嫌ですが、オコジヨになるというのはちょっと興味がありますね」と思案しておる様は、まだ少年の枠を出でていないのだと感じさせ微笑ましかつたのう。

入学以降は勉強も生活態度も真面目で好感を持てる他の先生方からも聞いており、申し訳ないと思いつつも監視をつけていたが不審な行動はないと報告された。

高畑君にも接触してもらつたが、

「彼自身はこちらに害を及ぼすことはないでしょう。生まれ育ちを抜きにすれば普通の生徒ですよ」
とのことじやつた。

秋山少年自身はシロ。ただし背後関係は灰色というのが僕の結論であった。魔法関係者である為、何人かの魔法先生を紹介したが、背後関係が不透明な以上、こちらに関わらせるには訳にいがず、彼も学外の秋山家から通学しておつた為、不要な接触は避けるように通達しておいた。

じゃから彼が入学をして何事もなく一年が過ぎようとした先月。

秋山少年自身からもたらされた『秋山家とその一門による犯行計画』

は寝耳に水もいいところじゃったわい。

ガンドルフィー一君なんかは、すぐさま秋山家を糾弾しに行こうとしておつたが、事を起こしとらん状況で追求してもかわされるだけじや。

また衰退したとはいえ関東呪術協会の名門だつた秋山家を一方的に責めようもんなら、他の呪術団体や組織がどんな反応を起こすかもわからん。

それに秋山少年から情報が漏れたと知れたら、彼の身が危険に晒され恐れもある。
決して迂闊な真似は出来ん。

かといって放置出来る問題ではない為、早急に対策を練らねばならなかつた。

情報が欲しい。そう思つた時、秋山少年が計画実行までの情報提供と、秋山家と呪術一派の不正や犯罪の証拠を収集する為の全面的な協力を申し出た。

有り難い話ではあつたが、彼が其処まで協力する理由がわからんかつた。

善良な少年じゃと思つとつたが、身内を糾弾出来るような信念や覚悟をもつような人間には見えなかつたからのう。

じゃが『何故君は其処までするんじや?』と問うたことは不覚じやつた。

秋山少年の口から語られたのは、祖父や一派による幼少時からの過酷な修行。

悪意と憎悪と妄執による西洋魔法使いへの排除を抱かせる為の洗脳染みた教育。

寝物語のように聞かされる関東呪術一派の悲惨で無惨で哀れな境遇。

そして何より、自身の周囲の人間が犯罪行為を平然と行っている事実。

まだ少年の域を出ておらん彼に話せることはあるまいに酷い内容じゃつた。

一緒に聞いておった Gandalf 二君は全身から怒りを滲ませ、高畠君も不快感に顔をしかめており、しづな先生は沈痛な面持ちで秋山少年を労つておつた。

儂は木乃香と秋山少年はよう似た環境で、魔法を知つてあるかそうでないかの違いしかないと思つておつた。

事実は違う。違ひ過ぎる

木乃香は皆に愛され庇護されておる。

秋山少年は誰からも愛されず道具として扱われておる。

入学して間もない時に対面した際も、人伝に聞く彼の様子も、いつも礼儀正しい年相応の少年だとしか思えんかったのに。

今ここにある彼は、大人へと成長していく過程を飛ばして作り上げられた歪な青年のように映る。

何故気付かんかったんじやろ？

この少年は、立ち振る舞いも、語る言葉も、在り方も、その全てが何一つ『普通』ではないのだと。

「学園長つー！聞いておられるのですかつー！」

「フォツー？う、うむ。ちゃんと聞いとるぞー、 Gandalf 二

君

いかんいかん。ちと以前のことを思い出しておつたら、田の前の問題のことを忘れておつたわい。

こんな姿を見せとつたら呆け老人扱いされかねんのう。

「ガンドルフイーー君。先程も言つたがあの少年の処遇は簡単に済ませられる問題ではないのじゃよ」

「だから何故なんですかつ！」

その理由をお聞かせ下さい！！

「彼の出自と立場じやよ・・

没落したとはいえ、彼は関東の呪術の名家秋山家の次期当主じや。今回的一件では儂らに協力してくれたが、彼の所属はあくまで呪術一派であり関東魔法協会の所属ではない。

しかも奴らの計画遂行の為の最も重要な役割をもつた中心人物なのが彼じや。

彼自身に罪はなくとも、儂らが彼を庇うことは対外的には難しいのう。

・

更には強大なあの魔力じや。

秋山家は今回の一件で今度こそ完全に潰れる。

そうなれば、行き場を失つた秋山少年を抱き込もうとする組織や団体はあの手この手で接触してくるじやろつ。

それを儂らが保護すれば「関東魔法協会に呪術の名門の子を奪われた」と反感や怨恨を抱かせることになる。

それは関東魔法協会と関東の呪術団体との溝を更に深めるだけでなく、新たな騒乱の火種となるのは間違ひなかろう。

そこまで言つて冷たくなつたお茶を一口啜る。
茶の味がやたらと苦く感じるわい。

ガンドルフイーー君も事情を理解したのか声を荒げる』ではない
が、「しかしそれではあまりに・・・と渋面で苦々しそうに唸つて
おる。

「学園長。魔法協会で彼を保護出来ないのであれば、関西呪術協会
に保護をお願いするのはどうでしょうか?」

ガンドルフイーー君が言葉に窮してあるかわりに、静かに控えて
いた葛葉くんが話を繋ぐ。

「それも厳しいのう。

確かに魔法協会よりは対外的にマシじやううが、関西呪術協会にも
関東の流れを汲む呪術師が多い。
向こうで大人しくしておる奴らを刺激しかねん。
それに関西の長である婧殿は近衛の一員じや。
魔法協会でなく『近衛に秋山の子を奪われた』といつ風に受け取ら
れ方が変わるだけじやよ」

葛葉くんも元々無理だと思つておったのか「そうですね・・・と
だけ言つて引き下がつた。
他の先生方の表情は冴えない。
秋山少年を取り巻く環境の不遇さを哀れと思つておるが、如何とも
し難い状況を理解し何も言えないようじや。
無力感は儂も一緒じやよ。

「あのう・・・学園長」

ガンドルフイー二君の後ろから、瀬流彦君がおずおずと顔を出した。

「ちょっと話が逸れるのですが、今夜捕縛した呪術一派の中にもう一人の重要人物である秋山家の現当主の姿が見当たらなかつたんですけど」

「それについては秋山少年から聞き及んである。
秋山の当主は今朝方に倒れて入院中らしいのじや。
入院先の病院にも確認して所在はこちらでも掴んであるから心配い
らん。
それにの・・」

秋山少年が儂らに協力する為に、彼が唯一提示した条件。
穏やかな少年の瞳に映つた、彼の他者に見せないようにしていた暗
い闇色の情念。
歪んでいる彼の本質の一端。

「『祖父のことは自分で決着をつける』」

それが秋山少年の望みじやつた。

「・・・とこゝ訳で秋山家並びに関東呪術一派の長年の悲願は、一夜の夢の如くさらりと過ぎ去り終焉を迎えたので御座います。今朝までお眠りであった御爺様に、夢から覚めたといつのは言い得て妙で御座いましょう」「う

入室するなり激昂して俺を出迎えた爺さんに、昨夜の顛末を俺の暗躍もネタバレしながら説明する。

爺さんはもう浮き出た血管が切れ、血が噴出ししそうなへりへり喚き散らす。

血圧高いんだから興奮し過ぎると[冗談抜きで脳卒中にならかねない。こゝは病院だからすぐに診てもうれるだらうし、元々そんなこと心配はしてないけど。

「御爺様。人払いは済んでおりますが、こゝは病院です。

大声をあげる」とは他の患者様の「迷惑になりますのでお控え下さい」

「ふやけるなっ！――

誰のせいでこゝなつたと思つてあるかっ！？

よもや儂らの悲願をよりにもよつて貴様に阻まれるとま――

魔法協会に尻尾を振り、関東呪術を裏切るなどこの恥をさらしがつ――

貴様に名門秋山の誇りはないのかっ！？

そんな糞みたいなもの。

そんなもの。

そんな毒みたいなもの。

「俺は欠片も持ち合わせちゃいねえよ。

なあ、爺さんは俺の何を見てきた？

秋山の為に身も心も尽くすように見えたか？

あなたの有益な道具として生きていることを享受しているように見えたか？

見えてなかつただろうな。

今俺の姿を見てそんな顔してんだもんな。

秋山蓮という存在をその力以外で見たことなんかなかつたもんなつ

！ ！

しつかり見ろよ？これがあなたが見てこなかつたモノだ！

あんたが俺を、俺の本質をちゃんと見ていいやこんなことにならなかつたんだ！ ！

くだらない悲願が失敗したの俺のせいだよ。
そしてあんたのせいだ。

あの下衆一派の連中にも謝つとけよ？

『耄碌した儂の濁り腐つた目と生塵みたいな妄想のせいで散々迷惑かけてごめんなさい』

つてなあつ！ ！

「

神様のところに居たとき以来だ。

こんなに感情に身を任せたのは。

爺さんの呆気にとられて口をパクパクしている滑稽な姿を見て、不愉快だけどちょっと爽快な気分になった。

「では御爺様。私は先に屋敷に戻つております。

お帰りの際は、先程お渡しした雑誌に長距離用の転移符が挟んでありますので、そちらをお使いになつて下さい。

残念なことに御爺様は現在犯罪集団の長として厳重に監視されています。

そのまま外へ出られますとあつという間に捕縛されてしまいます。祖父の身を案じるものとして愚考いたしました結果、この方法が最善であると判断致しました。

では屋敷でまたお会いしましょう。

ああ、一応確認しておきますが、

『逃げるなよ糞爺。あんたの大事な腐臭のする誇りにかけて俺を殺しに来い』

、で御座います。

ではこれにて失礼致します』

未だに自らの身に起きた事態に混乱している爺さんに恭しく一礼して、扉に貼った人払いの呪符を剥がして病室を出る。

人払いの呪符がなくなると急に人の気配が濃くなるので、いきなり沢山の人囲まれたようで気分が悪くなる。

爺さんの病室を教えてくれた看護師とすれ違つたので、改めてお礼を言うついでに「想像していた以上に祖父の様子が変でした。話しがちぐはぐで私のことを化け物扱いしたりと要領が得ません。考えたくはないのですが痴呆が始まっているのかかもしれません」と困惑した表情で伝えておく。

看護師から「入院したことで一時的に混乱されているのかもしれません

ません。氣を落とさないで下さこ」と優しい笑顔で励まされる。正直ちょっと惚れかけた。

本来なら事件の重要な参考人である俺が外出することは難しいかと思つていたのだけれども、学園長も他の先生も割とあっさり許可してくれた。

俺の人柄を信用されていろらうしに。やはり普段の行いがござといふ時ものを言ひつ。

俺が言つた条件のこともあり、爺さんと俺、互いに何をするか心配もあるのだらう。離れたところで監視をせつほしいと言われ、別に困ることではないので了承しておいた。

秋山の屋敷に着いてから、衣服や最低限の生活用品、両親の位牌をバッグに入れて、多分大丈夫だと思つが盗まれないように認識阻害の呪符を貼り付けて外に隠す。

十数年住み、良い思い出など数える必要もない無駄に大きな屋敷を一眺めして、屋敷の最奥へと歩み進める。

屋敷に罪はないけれども、どうせ誰もいないのだし勢い任せに襖を蹴り破つたり、障子に穴を空けたりと、はっちゃけながら進み、途中で自分のやつてることの阿呆つぶりに酷く落ち込んだ。

でもまあこれくらいいいだらう?

やつは今日までの場所も薄くならぬのだから。

第六話・後の祭り（後書き）

平均年齢の高いキャラしかまだ登場しないといつ。

学園長に視姦される主人公。

「学園長は舐め回すかのように彼の頭上から足先を眺めていた」としづな先生が第三者視点で見ていたとかいなか。

容姿は当初平凡か美形か迷いましたが、せっかく漫画の世界に来たのだから格好良く描いてあげようと、良く解らない理由で決めました。

主人公やその周りが格好悪いかわりに、原作の方々には格好良く素敵な人物にしたいです。

次回初戦闘。

戦闘描写も駄目っぽい。

何なら書けるんだ・・

『文才買います。金額要相談』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7202y/>

自分らしい生き方を

2011年11月23日18時55分発行